

建築名	藤間家住宅
所在地	茅ヶ崎市柳島
建設年	昭和7（1932）年5月6日上棟（棟札）
設計者	西村建築株式会社
施工者	石井金寿（大兼）
構造	木造平家建
規模	148.41 m ²
屋根	亜鉛鉄板葺
外壁	イギリス下見板貼ペンキ塗り および押縁下見板貼
基礎	布基礎

藤間善左エ門（謙次郎）長男として明治 32(1899)年 10 月 24 日に生まれ、大正 6(1917)年神奈川県立農業学校本科卒業、大正 7 (1918)年東京農業大学農芸化学部短期科に入学し、卒業後、神奈川県農事試験場助手をへて、農商務省にて肥料検査に関する農業練習生を修了し、技手として大阪府、茨城県、兵庫県に勤務。大正 13(1924)年 12 月、25 歳の時に役人を辞し、大正 15(1926)年から東京京橋明治屋ビル内のキンビール株式会社研究部に勤務。戦後は町内会連合会長や教育委員等を歴任し、茅ヶ崎の郷土史家としても活躍し、昭和 45(1970)年 12 月逝去。

柳庵
(善五郎) ⑬
明治一六

つる

つね

たつ

欽三
(善左衛門) ⑭

環太郎
(善左衛門) ⑮

フジ

せい

ヤマ

テイ

甲子三郎

よう

謙次郎
(善左衛門) ⑯

善一郎 ⑰

はな

三女

克子

雄蔵 ⑱

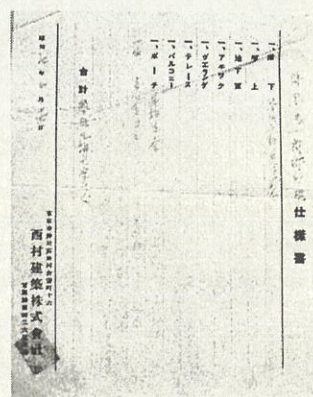
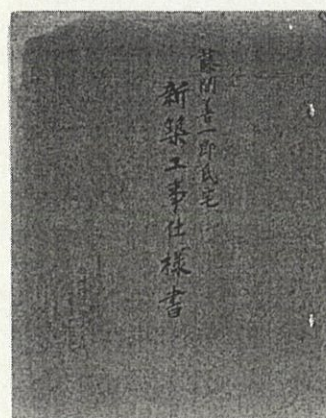
次女

長女

桐太郎

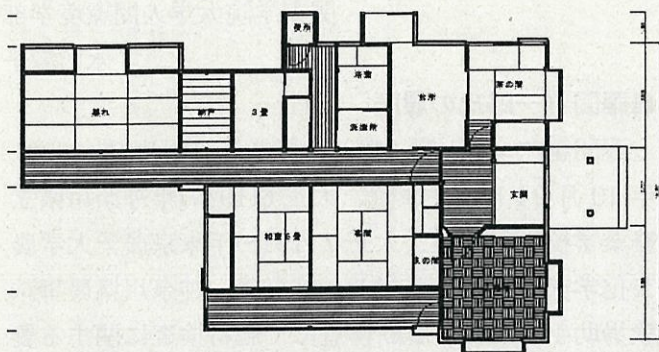
- ①「藤間善一郎氏宅新築工事仕様書」
- ②「藤間善一郎氏宅新築工事費見積書」
- ③「昭和七年藤間家本普請諸材料一切書上綴り封入」

平面図（縮尺 1/50、透視図を含む）
 天井伏図（縮尺 1/50、南北断面図を含む）
 地形伏図（縮尺 1/50）
 床伏図（縮尺 1/50）
 小屋伏図（縮尺 1/50）
 矩計図（縮尺 1/10）



■藤間家住宅の建築的特徴

<間取り>



玄関脇に洋風応接間

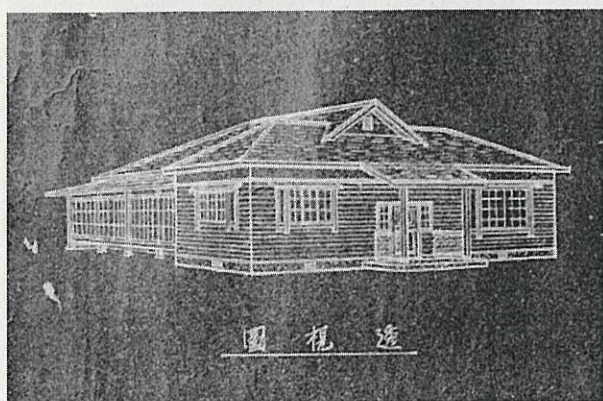
中廊下の存在

既存部分としての「離れ」

<外観意匠>



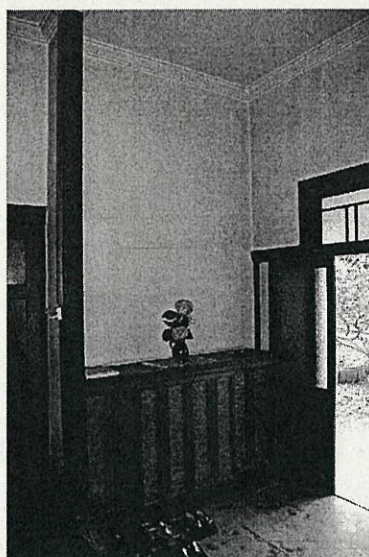
現状



西村建築株式会社が作成した透視図

西村案 洋風で統一した外観意匠を提案
創建時からほぼ変更のない現状 和館部分を強調する
意匠。相違はなぜ生じたのか？建設費や父謙次郎氏意
向か？棟札には西村の名はなし。藤間家の住宅である
ことや柳島を立地とする意味。

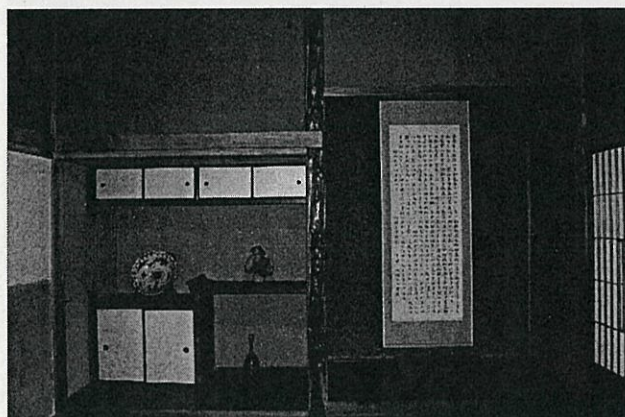
<内部意匠>



玄関内部



応接間



客間

■西村建築株式会社

西村伊作によって設立された建築の設計施工監督を行う会社。大正 10(1921)年、兵庫県御影に開設。大正 12(1923)年には東京にも開設。東京の事務所は、西村が自身の子どもの教育のために大正 10(1921)年に開設した文化学院内。昭和元(1926)年には株式会社化。

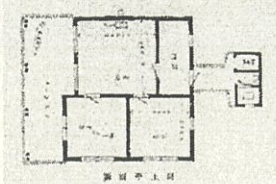
営業種目は「現代の新日本人の生活に適する住家 英国式田園住宅(コテージ)、米国式バンガロー、南欧式住家(スパニッシュ、イタリアン)、日本家(改良住宅、純日本式)」の他「公共的小建築」「家具、室内設備、暖房、門、塀等」など。そのほか「すべての図案、設計、工事監督及その施工などについて一般の御依頼」に応じるものの、「営業本位の会社としてではなく芸術家のアトリエの気分を以て」動く(西村建築株式会社「建築案内」より)。

■西村伊作

明治 17(1884)年 和歌山県東牟婁郡新宮横町(現在の新宮市)に大石余平・ふゆの長男として誕生。両親の逝去に伴い、8歳で母方の実家西村家の家督を相続。アメリカで医学を学んだ後新宮で開業した伯父大石誠之助と一時同居し、伯父からアメリカの生活様式などを学ぶ。青年期には絵画や写真、陶芸など芸術に親しむ。西村家という強固な経済的後ろ盾のもとに、伊作は自らの趣味や思想を思う存分追求し実践する。大正 3(1914)年、31才の頃自邸建設。大正 8(1919)年『楽しき住家』を出版し 20世紀初頭アメリカで流行していた「バンガロー」と呼ばれる住宅を紹介。大正 9(1920)年、大阪毎日新聞と東京日日新聞に「文化生活と住宅」と題した論文を9日間にわたり連載。その他多彩な活動を展開。



西村伊作
(『我に益あり』より)



西村伊作の紹介した「バンガロー」
(『西村伊作の楽しき住家』より)

■藤間家住宅の建築的価値

1) 柳島の旧家藤間家の住宅としての価値

藤間家は江戸期には柳島湊における廻船業と農業を手広く営み、また、柳島村の名主を務めた家柄である。幕末に藤間家の 13 代当主だった藤間柳庵は秀でた郷土の指導者でもあり、また、『太平年表録』をはじめ多くの著作を残し地域文化に多大な貢献をした人物だった。柳庵のみならず、藤間家では代々の主人が種々の文書を書き残しており、その多くが今日まで伝えられている。藤間家の場合、文書によって「家」の歴史が色濃く継承されている点に特色を持つ。藤間家は現在まで継続して同一地において継承された地域の名家であるとともに、史資料とともに地域の歴史を語ることの出来る稀有な存在であるといえる。

昭和期に藤間家を継承した善一郎氏は、大学で農業技術を修め各地で公吏を務めた後、技術者としてキリンビールに勤務した。茅ヶ崎の農村地帯柳島にありながら都市的な生活スタイルを有していたといえる。藤間家は代々農業を営んでいたが、大正期には農業のみに依拠する経営形態から変化しており、さらには善一郎氏が俸給生活者となったことで、農家的色彩は希薄になった。現存する藤間家住宅は、善一郎氏によって昭和 7(1932)年に建設された住宅だが、土間など農家的色彩とは無縁な住宅である。すなわち、現存する藤間家住宅は、17 世紀まで遡ることのできる柳島の旧家藤間家が、関東大震災後に実現した、旧来の農家的な生活形態とは一線を画する、新たな都市的な生活の器としての住宅といえることができる。すなわち、現存する藤間家住宅は、戦前期における藤間家の変容を反映した住宅であり、藤間家の歴史を知る上で貴重な住宅である。

2) 西村伊作の作品としての価値

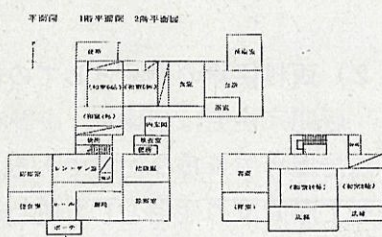
藤間家住宅は創建年、設計者、施工者が判明する点で極めて貴重な住宅である。また、創建以来一貫して藤間家の住宅として使われ続け、改修も少なく当初の様相を極めて良く留めている。

藤間家住宅の設計を手がけたのは西村建築株式会社である。西村建築株式会社は文化学院の創設者でもある西村伊作が、自身の住宅建築を契機に創立

した建築事務所であり、これまでその仕事の様相について多く言及されている。藤間家住宅の場合、西村建築株式会社の得意とする居間を中心とする洋風住宅ではないものの、和風部分を既存部とする郊外における設計例であり、さらに設計図や仕様書、見積書など西村建築株式会社の実際の仕事の様相を知ることのできる史料が現存している点で貴重である。特に、西村建築事務所がその営業種目の一つとして掲げた「日本家（改良住宅）」に該当する例と考えることができ、西村の広範な設計活動の一端を知ることのできる住宅である。

西村は住宅の外観について純然たる洋風にして中に日本間を採り入れるか、純然たる日本風の民家にして中に洋間を旨く取り入れるのは良しとし、「日本風の家の前に鶏小屋のような不格好な洋館を食付けることは最も見難い」としている。設計図書に見られた外観の統一は西村の主張を具現化したものであり、一方、実現した藤間家の外観は和館を強調した意匠となっており、この点は、茅ヶ崎郊外の農村部に立地する藤間家という家格に起因するものとも考えられる。

なお、藤間家住宅の設計を西村建築設計事務所が手がけた経緯は不明だが、茅ヶ崎には他に一件、西村の手になる建築の存在が確認されているⁱ。共恵に位置した生泉堂医院である。生泉堂医院は南湖院に勤務する医師高橋誠一が開院した病院で、大正13(1924)年建築とされ、設計は西村伊作、施工は石井兼吉である。生泉堂を手がけた大工兼吉は、藤間家出入りの大工だったことが判明しておりⁱⁱ、石井兼吉が藤間善一郎氏と西村伊作を直接結びつけるのに大きな役割を果たしたものと考えられるⁱⁱⁱ。



茅ヶ崎生泉堂医院
 (『西村伊作の研究』田中修司東京大学博士論文 より)

3) 茅ヶ崎に現存する戦前期洋館付き住宅としての価値

藤間家住宅は住宅の一部を洋館としており、こうした住宅形式は戦前期の都市郊外においてしばしば見られる住宅形式だった。しかし、近年では希少となっており、神奈川県内においてはすでに横浜市所在の山口家住宅や田畑家住宅がその価値を認められ、国有形登録文化財に登録されている。茅ヶ崎市内にも藤間家住宅以外に数棟が確認されており、藤間家住宅は茅ヶ崎に現存する数少ない一軒洋館付き住宅として貴重である。しかしながら、すでに指摘したように、藤間家住宅の場合、洋館部分と和館部分を一体化した意匠に特色があり、こうした点において、茅ヶ崎に所在する一軒洋館付き住宅とは一線を画す洋風住宅として注目すべきものである。

4) 景観上の価値

藤間家住宅が所在する柳島一帯はかつては柳島湊として、その後は農村地帯として今日に至る地域である。藤間家住宅は広大な敷地に立地し、江戸期に柳島村で名主を務めた家格を今日に良く伝えていいる。また、敷地周囲一部には江戸期に遡る石垣が現存するなど、茅ヶ崎柳島の景観の変遷を知るのに貴重な住宅である。敷地内には茅ヶ崎市の天然記念物に指定されているキャラボクをはじめ梅林、タブノキなどが植生し、また、裏門道路沿いには棕櫚の大木が群生する。そうした緑陰の中に見え隠れする藤間家住宅は、かつての茅ヶ崎に現存した田園風景を今日に伝える景観であり、茅ヶ崎の発展を知る上で貴重な景観である。

藤間家住宅は以上のように茅ヶ崎にとってかけがえのない貴重な歴史遺産であり、長く後世に伝えられるべき存在である。

i 『日本近代建築総覧（新版）』日本建築学会、1983年

ii 藤間雄蔵氏による。

iii その他、善一郎氏自身も農商務省関連の仕事のなかで、大正期に盛んだった住宅改良に関心を有していたことも考えられる。

題名 茅ヶ崎柳島 藤間邸（西村伊作設計）油彩画 20 号 P 2008 年 5 月完成

作者 矢田健爾（フランス・ナショナルデボザール会員）

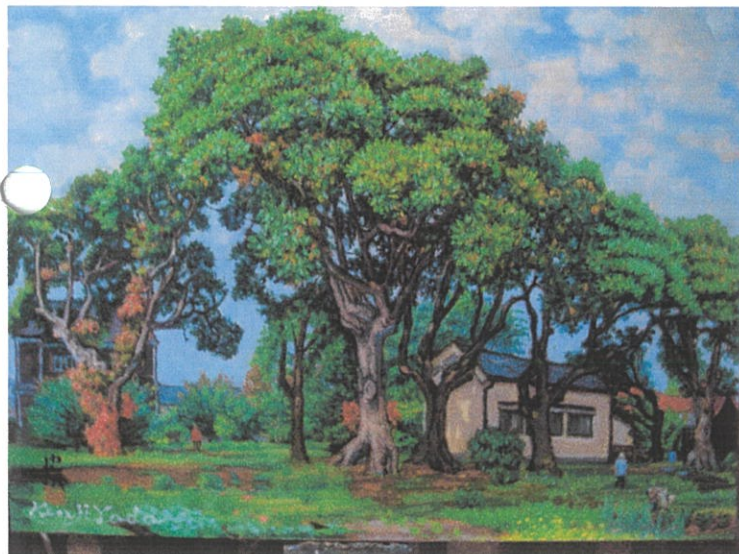


この邸宅は 1933 年に完成しました。バランスの良さ、明るく近代的感覚と重厚さを併せ持つ建築であること、庭や玄関に至るアプローチなど、環境と見事に調和しているところに興味を持ちました。この藤間邸の設計者は西村伊作という大正時代を代表する建築家で文化学院創設者であり大正期自由主義教育の実践者としても高く評価されています。住宅の近代化を進め、来客中心の客間を重視した設計から家族中心の間取りにし、各部屋の独立を保つため中心に廊下があります。それは中廊下型住宅と呼ばれています。出窓は 2 重ガラス窓で応接間や玄関は映画のセット

のように見えてくる様な、懐かしさがあります。人間中心の考え方が現れていると感じます。今でも生活感があふれ、往時の状態が良く維持されていて、住んでいる方の苦勞が理解できます。つつじの下に藤間家の家訓石があり“身代は預かりものと心得て増やすより先ず減らさぬがよし”と柳庵の筆跡で刻まれています。

題名 柳島景観 油彩画 20 号 P 2008 年 6 月完成

作者 矢田健爾（フランス・ナショナルデボザール会員）



藤間柳庵ゆかりの地です。

柳島を代表する景観で樹齢 200 年のタブの古樹が群生し、脇芽の燃え立つ春にはきらめく新緑を輝かせ、幹は節くれ、支える根は高く上がり、古樹の生命力のたくましさを物語っています。ここに柳庵先生も眺めたであろう風景が存続している事に感懷を覚えます。歴史の近代化の中で良くもまあ、この景観が保全されたものだと言葉を巻く想いで感動します。これを後世に伝えるべき社会的責任は重く、個人の私権を越えて保存すべきだと思うのです。フランスではパリから南 100 キロほどの所にフォンテンブローの広大な森が保存されていますが、ここにはバル

ビゾン村や、黒田清輝の滞在したグレー村があります。19 世紀に鉄道が発達し開発が進む中で、日本人が最も好むジャン・フランソワ・ミレーという画家がいますが、この森を愛し有名な「落穂ひろい」や「晩鐘」をここで描きました。これに共鳴した画家たちは他にもいました。バルビゾン派と呼ばれています。彼らのお陰で環境は守られました。ここ柳島はバルビゾンを思い出すほどです。筆者はパリ留学中にミレーを模写したことがあります。

市民にとってもかけがえないこの景観を何としても、保存し続けて欲しいものです。

2008 年 6 月 26 日 矢田健爾（75 歳） 記

画家 矢田健爾 略歴

1933年 東京に生まれる

1952年 神奈川県立湘南高校卒業

1957年 東京藝術大学油絵科卒業 (林 武 教室)

1958年 東京藝術大学油絵専攻科終了

1964年 パリ国立美術学校入学

1967年 ルーブル博物館にてミレーを模写

1968年 帰国 (在仏 5 年)

1982年 東海大講師

1992年 フランス・ナショナルデボザール会員となる

1999年 画業 40 年記念画集刊行

平和美術家会議会員、日本美術会会員、神奈川県展客員、I.M.A 客員審査員

個展回数多数 (横浜高島屋、銀座松坂屋、平山郁夫推薦により東京セントラル美術館他)

